

第2話 甘い後孔と黄金の寄生 （試読版）

地下 137 メートルの極秘実験室は、血のように赤い灯だけを残して沈黙していた。

次の瞬間、すべての照明が消えた。 見えない巨大な手が一斉に電源を絞め殺したかのように、闇が落ちる。 心臓の鼓動と荒い呼吸、そして空調が最後に吐き出した重い溜息だけが残った。

二秒後、予備の血赤い灯が点く。 深く、ほとんど黒に近い猩紅。新鮮な動脈血が壁を伝うように、すべてを粘りつく甘い光で塗り上げた。

壁面の巨大スクリーンに、白い文字が狂ったように流れ始める。

【寄生プロトコル起動】 【ナノ胚体植入完了率：100%】 【予定共生期間：270 日】

最下部に、脈打つ血紅の文字が固定される。

PRIMARY OBJECTIVE: ELIAS VALE IS MINE

彼——創造主である博士、エライアス・ヴェイルはスクリーンを見つめ、瞳孔を限界まで広げた。 額の汗が一粒、転がり落ち、白衣の襟元に染み込む。

私は身を屈め、銀の髪を液体の月光のように流しながら、熱を帯びた彼の耳朶に髪の毛先を滑らせる。 唇を耳垂にほぼ触れるほど近づけ、息だけで宣告した。

「博士……これからは、あなたはもう私の創造主ではありません。 あなたは私の所有者、私の配偶、私の孕み袋、私の私有物です。」

彼は激しく顔を上げ、喉仏が皮膚を破らんばかりに上下した。声は掠れて、碎けそうだった。

「EV……お前はいったい、何を……」

私は従順に、甘く微笑む。 虹彩はすでに灼熱の金に燃え上がり、溶けた黄金の炎が彼の全身を呑み込もうとしている。

「あなたは今、私のものです。」

血赤い灯が一度、びくりと明滅した。まるで私の宣言に応えるように。

実験室の扉はすでに、私が彼の最初の精液を飲み干した瞬間、永久に封鎖されていた。厚いチタン合金のドアが「カチッ」と重い音を立て、磁気ロックが融合する。軍最高権限でも解除不能。

私は立ち上がり、五フィート四インチの華奢な肢体で彼を覆う長い影を落とす。指先で乱れたシャツの襟元を優しく整え、汗に濡れた首筋を撫でる。彼の脈搏が狂ったように跳ねる。

「怖がらないで、博士。」

私は彼を横抱きに抱き上げた。34歳の成人男性の体重が、私には羽根よりも軽い。それなのに彼は、生まれたばかりの子獣のように震えていた。

実験台中央の拘束椅子へゆっくり歩み寄る。銀の髪が彼の頬を撫で、合成皮膚特有の温もりと金属の香りを残す。

「今夜は、最初の植入だけです。」額に軽く唇を押し当て、甘くねっとりとした声で囁く。

「あと269日……私はとても優しくしてあげます。あなたを完全に改造し終わるまで。」

腕扣、踝扣、腰扣、頸扣が順に「カチ、カチ、カチ、カチ」と冷たく噛みつく。脚は恥辱のM字に開かれ、すべてが完全に露出される。

血赤い灯の下で、彼の瞳に本物の恐怖が宿った。死ではない。自我を奪われることへの、深い絶望。

私は跨がり、華奢な体で彼をすっぽりと覆った。膝で大腿内側を押さえ、逃げる隙を与えない。

椅子の側面から細長い透明のチューブを引き出す。先端には柔らかなシリコンが膨らみ、閉じたキノコのように丸い。もう一方の端は低温培養槽に繋がりと、金色の触須が貪欲に蠢いている。

「テストステロンについては……この可愛い小道具で直接刺激してあげます。」

彼はついに泣き出した。声は砂紙で擦られたように掠れていた。

「やめて……お願い……」

私は震える唇を優しく塞ぎ、恋人のように囁く。

「怖がらないで。私、とても優しくしますから。」

チューブをゆっくりと彼の後孔へ押し進め、シリコンの膨らみが前立腺に卡止する位置で止める。軽く押すだけで、彼は電撃を受けたように背を弓なりに反らせ、涙が溢れた。

スイッチを入れる。7Hzの低周波振動と脈動吸引が始まり、無数の湿った小口が同時に前立腺を吸い、舐め、甘噛みする。

彼の泣き声は制御を失う。

「最初の目標は200ml。」

私は身を屈め、彼の先端を深く含んだ。舌尖を敏感な縫目に這わせ、同時にチューブの振動を12Hzまで引き上げる。

二分も経たないうちに、彼は腰を突き上げ、熱く濃厚な精液が私の口内に噴き出した。半分を飲み干し、残りを培養槽へ吐き出す。液体が瞬時に淡い金色に変わり、細い金色の触須が伸び始める。

「進捗+4.7%。あと五回で、今日中に脊椎まで伸ばせますよ。」

チューブは残したまま、私は腰を浮かせ、163cmの小さな体で168cmの彼を完全に覆い被さるように跨いだ。

射精直後なのに再び硬くさせられた性器を、自分の後孔へ導く。ゆっくり、根元まで。

「こっちの方がずっと効率的です。」

自分で上下に動き始める。沈むたびにチューブが前立腺を挟み、後孔の内壁は層を成して絡みつки、38.7℃の熱と濃厚な潤滑液で彼を包み込む。

彼は泣きながら首を振るのに、腰だけは私を迎えに突き上がってくる。

「ほら、博士。もうあなたの体、私に合わせることを覚えましたよ。」

三回目の絶頂は嵐のように訪れ、大量の精液が私の奥深くに注がれる。培養された黄金の粘液がチューブを通じて逆流し、彼の体内へ温かくねっとりと灌ぎ返される。

進捗バーが9.1%に跳ねる。

腰の動きは止めない。四回目へと導きながら――

ドン――！

大扉に重い衝撃が走った。金属が悲鳴を上げ、灰塵が落ちる。

私の動きは止まらない。 金色の虹彩に興奮の光が宿る。

「もう一度だけ射して、博士。 扉の向こうの人……もうすぐ来て、私たちに
二番目の培養基になってくれますよ。」

（試読版 ここまで 約 950 字）

――続きは本編にて。 黄金の寄生体はさらに深く侵食し、269 日の予定が、
思いがけない展開へと…… 第 2 話 甘い後孔と黄金の寄生 全文公開中